

剣道形の必要性について

恵 土 孝 吉
林 邦 夫

- I 緒 言
- II 日本剣道形の発生
- III 剣道形解説
- IV 結 び

I 緒 言

文部省は昭和20年11月6日付発体80号通達によって、剣道を学校体育として実施することを中止したのであるが、世相の根強い国技愛好の声と、剣道の教育的価値を再認するに及んで、昭和27年4月「しない」競技を体育教材として中学校に採用することになった。その後「しない」競技は一般社会にも普及し、同年10月14日には、全日本剣道連盟が組織された。

一方文部省においては社会的思潮と剣道界の動向にかんがみ、保健体育審議会において審議の結果、新しい剣道を学校に採用してもよいとの結論に達し、昭和28年7月から高校以上の学校に、体育教材として取り入れてもよいこととなった。その後剣道の内容をよく吟味し、従来の剣道に一層の改善を加え「学校剣道」として昭和32年5月20日付で中学校以上の学校に正課として実施してよいことになったのである。

それ以後、学校においては正課として、あるいはクラブ活動として盛んに行なわれるようになり、一般社会においても隆盛の一途をたどって今日の盛況をみるに至ったのである。

剣道の修練方法は、「しない打の剣道と形剣道とに大別することができる。」

徳川中期迄はもっぱら形剣道であったのである。「しない」剣道が発明されてからは、（宝暦，明和の頃に至って一刀流の中西忠太が兜，胸当て，甲手に擬して面，胴，小手を工夫した。¹⁾）両者を併用してその効果を収めたのであるが，明治以後は「しない」剣道が中心となり，現代においては，形剣道が軽視される傾向がある。しかし，形剣道は，姿勢を正し，理合を知り，体捌き及び刀の操作方法の基礎修練としてきわめて効果的であるから，これからの剣道は，形の重要性を認め，その修練を怠らない事が肝要であろう。

Ⅱ 日本剣道形の発生

上代の時代に，剣法を工夫したものに，「日本武尊」がある。彼は「天地人」即ち，「上下中」三段の位を定めたといわれている。²⁾ 又，日本紀元一千年頃，常陸国鹿嶋に国摩真人が剣技をたしなみ，「神妙剣」という太刀の法を定めた。これがいわゆる「鹿嶋の太刀」といわれているものであり，後世，諸流が多くこれから出た。その後，中世に至り，鎮西八郎源為朝は，尾伊平次郎太夫教高に剣法を学び，技両は師を凌ぎ，天・地・人の外に「陰」「陽」即ち，右・左の二段の位を加え，五段の位と五個の構えを定めた。

その後「鹿嶋の太刀」と戦場における経験を基にして各流各派が生まれた。

徳川時代に至って，流派は二百余流といわれた。各々の流派は各流各派の形をもって修練したのである。

現代行なわれている日本剣道形は，それらの形を統一して出来上ったものであり，明治44年（1911年）7月31日に改正・中等学校令施行規則が發布され剣道が中等学校に正科教材として加えられることになり，剣道の指導上いずれの流派にもかたよらない統一的，普遍的な形の制定の必要を生じたので，文部省はこの機会に全国の剣道権威者に形の調査を囑託して新しい形の制定にのりだしたのである。調査を囑託された氏名と県を記す。³⁾

主査委員——高野佐三郎（東京），内藤高治（武徳会本部），辻真平（佐賀），根岸信五郎（東京），門奈正（武徳会本部）の五氏。

委員 真貝忠篤（東京），和田伝（熊本），湊辺邦治（武徳会本部），柴江運八郎（長崎），太田弥龍（京都），矢野勝治郎（京都），中山博道（東京），高橋赴太郎（兵庫），田中厚（愛知），小関教政（山形），小沢一郎（茨城），星野仙蔵（埼玉），上村信夫（新潟），二宮久（山口），井川善三郎（高知），佐々木正宣（鹿児島），浅野一摩（福岡），富山 円（台湾）。

各委員は各流派の特色を生かそうと原案作成にいどみ，再々の修正を加えて決定された日本剣道形（大日本帝国剣道形）を全国の中等学校以上の校長ならびに主たる剣道家に通知して，その普及に努力した。

ちなみに，大日本武徳会本部が数次にわたり大日本帝国剣道形制定に関して公表した原文と形制定の原文を記す。⁴⁾

思フ帝国ノ将来ニ致セハ，武道奨励ノ必要ヲ感スルコト益々切ナリ，然リ而テ曩年剣道，柔道ヲ中等学校ノ正科ニ加ヘラレタルノ一事ハ斯道上ノ一新紀元トモ称スヘク，既ニ国民教育タルノ形式ヲ具備シタル以上ハ斯道ニ従事スル者一層ノ努力ヲ要シ且，其教授上ニ於イテモ統一的方法ヲ講スルノ必要ニ逼レリ，今之ヲ剣道ニ見ルニ之レカ教範ヲ求メムトスルニ当リテ各流各派皆特色ヲ有スルモノアリ其一ヲ択テ以テ直チニ一般的教範ト為サムコトハ宜ニ適セルヤ明ナリ，大日本帝国剣道形ハ此ノ要求ヲ充サムカ為ニ，大正元年十月本会自ラ主催者トナリ，全国ニ於ケル斯道専門家ノ多数ニ之カ調査委員ヲ囑託シ慎重審査ノ末，各委員ノ一致セル意見ヲ採リテ制定シタルモノナリトス，爾来公私一般ニ普及シ統一ノ実挙レルカ如キハ啻ニ本会ノ満足ニ止ラス，寔ニ斯道ノ大慶ト謂ツヘキナリ，然リト雖，実施数年成績ニ徴スルニ細目ニ至リテハ，往々魯魚ノ異同ヲ見ルモノナシトセス，是レ当初ノ目的ニ鑒ミテ遺憾トスル所ナリ，依テ其区区ニ陥リ易キ点ニ対シ註ヲ加ヘテ斯軌ヲ一ニスルハ機宜ニ適スルノ措置ナリト認メ，反覆調査ヲ費シテ茲ニ加註ヲ公ニセリ学剣ノ士希クハ本会ノ趣旨ヲ諒トシテ制定ノ目的ニ副フ所アラムコトヲ。

大正6年9月

大日本武徳会本部

日本剣道形制定原文⁵⁾

(1) 立 会

1. 打太刀, 仕太刀剣ヲ提ケ立礼ニ始ム

1. 立間合ノ距離ハ凡ソ九歩トス

但シ互ニ大キク三歩ヅ、踏ミ出シ蹲躡シツ、剣ヲ抜キ合ス其ノ構ハ稍々右足ヲ踏ミ出シ右自然体トナルヲ度トシテ立上リ剣尖ヲ下ゲ互ニ左足ヨリ小サク五歩退キ其条項ノ構ヲ為ス

1. 最終ノ礼ハ最初ニ同シ

懸 声

1. ヤー, トーノ二声トナス事

剣

1. 正式ニハ白刃ヲ用フ

1. 練習ニハ木剣ヲ用フ其ノ寸法左ノ如シ

総尺三尺三寸五分 柄八寸

小太刀一尺八寸 柄四寸五分

第一本

打太刀左諸手上段, 仕太刀右諸手上段ニテ互ニ進ミ (打太刀左足ヨリ仕太刀右足ヨリ) 間合ニ接スルヤ打太刀ハ機ヲ見テ右足ヲ踏ミ出シ仕太刀ノ正面ヲ打ツ, 仕太刀ハ左足ヨリ体ヲ少シ後方ニ抜キ打太刀ノ正面ヲ打ち左足ヲ出シ上段ニ冠リ残心ヲ示ス, 打太刀ハ剣尖ヲ下段ノマ、左足ヨリ二歩退キ下段ヨリ剣尖ヲ中段ニ着クルヲ仕太刀モ同時ニ上段ヲ下ロシ相中段トナリ剣尖ヲ下ゲ元ニ復ス

第二本

打太刀, 仕太刀相中段ニテ互ニ進ミ間合ニ接スルヤ打太刀ハ機ヲ見テ仕太刀ノ右籠手ヲ打ツ, 仕太刀ハ左ニ左足ヲ披キ大キク右足ヲ踏ミ出シ同時ニ右籠手ヲ打ち相中段トナリ剣尖ヲ下ゲ元ニ復ス

第三本

打太刀, 仕太刀相下段ニテ互ニ右足ヨリ進ミ間合ニ接スルヤ打太刀ハ機ヲ見テ剣刃ヲ少シ仕太刀ノ左ニ向ケ諸手ニテ仕太刀ノ胸部ヲ突ク, 仕太刀

ハ之ヲ入レ突キニ流スト同時ニ打太刀ノ胸部ヲ突ク, 打太刀ハ此時右足ヲ引キ仕太刀ノ劍尖ヲ右ニ押ヘ左足ヲ引クト同時ニ又左ニ劍尖ヲ押ヘルヲ仕太刀ハ左足右足ヨリ位詰ニテ稍々二三歩右足ヨリ進ミ後相中段トナリ劍尖ヲ下ゲ元ニ復ス

第四本

打太刀ハ八相, 仕太刀脇構ニテ互ニ左足ヨリ進ミ間合ニ接スルヤ打太刀ハ機ヲ見テ八相ヨリ仕太刀ノ正面ヲ打ツ, 仕太刀モ同時ニ脇構ヨリ打太刀ノ正面ヲ打ツヲ以テ相打トナリ打太刀ハ劍刃ヲ少シ仕太刀ノ左ニ返シ右足ヲ進ムルト同時ニ諸手ニテ仕太刀ノ胸部ヲ突ク, 仕太刀ハ左足ヲ左ニ転スルト同時ニ捲キ返シ打太刀ノ面ヲ打チ相晴眼トナリ劍尖ヲ下ゲ元ニ復ス

構ノ説明

○ 八 相

左上段ノ構ヨリソノママ (刀ヲ執リタルノ形) 右拳ノ右肩ノ辺マデ下リタル形

○ 脇 構

右足ヲ後ニ左半身トナリ刀ヲ右脇ニ刀尖ヲ後ニシ刃ハ右斜下ニ向ケ刀尖ハ下段ヨリ少シ下リシ位置ニトリタル形

第五本

打太刀左諸手上段, 仕太刀晴眼ニテ互ニ進ミ (打太刀ハ左足ヨリ仕太刀ハ右足ヨリ) 間合ニ接スルヤ打太刀ハ機ヲ見テ右足ヲ踏ミ出スト同時ニ諸手上段ヨリ仕太刀ノ正面ヲ打ツ, 仕太刀ハ其ノ劍ヲ摺リ上ゲ打太刀正面ヲ打チ右足ヲ引キ左上段ニ冠リ残心ヲ示ス, 打太刀ハ劍尖ヲ晴眼ニ着クルヲ以テ仕太刀モ左足ヲ引キ劍尖ヲ晴眼ニ下ロシ相晴眼トナリ劍尖ヲ下ゲ元ニ復ス

第六本

打太刀晴眼, 仕太刀下段ニテ互ニ右足ヨリ進ミ間合ニ接スルヤ仕太刀ハ機ヲ見テ下段ヨリ劍尖ヲ晴眼ニ着クルヲ打太刀ハ右足ヲ引クト同時ニ左上段ヲ冠ル, 仕太刀ハ晴眼ノママ大キク右足ヨリ一步進ム, 打太刀ハ直チニ晴眼トナリ機ヲ見テ仕太刀ノ右籠手ヲ打ツ, 仕太刀ハ其ノ劍ヲ摺リ上グル

ト同時ニ右足ヲ左ニ披キ右足ヲ踏ミ出シテ右籠手ヲ打チ左足ヲ踏ミ出シ上段ニ冠リ残心ヲ示ス，打太刀ハ劍尖ヲ下ゲ左足ヨリ引キ相晴眼トナリ劍尖ヲ下ゲ元ニ復ス

第七本

打太刀，仕太刀相晴眼ニテ互ニ右足ヨリ進ミ間合ニ接スルヤ打太刀ハ機ヲ見テ仕太刀ノ胸部ヲ諸手ニテ突ク，仕太刀ハ諸手ヲ伸ハシテ劍尖ニテ其ノ劍ヲ支ヘ互ニ相晴眼トナリ打太刀ハ左足ヲ踏ミ出シ右足ヲ踏ミ出スト同時ニ体ヲ捨テ諸手ニテ仕太刀ノ正面ニ打込ム，仕太刀ハ右足ヲ右ニ披キ左足ヲ踏ミ出シテ体ヲ摺リ違ヒナガラ諸手ニテ打太刀ノ右胴ヲ打チ右膝ヲ蹲踞脇構ヲナシ残心ヲ示シ後相晴眼トナリ劍尖ヲ下ゲ元ニ復ス。

◎ 説明

第一本 相上段ハ先ノ氣位ニテ互ニ進ミ先々ノ先ヲ以テ仕太刀勝ツノ意ナリ。

第二本 相中段ハ互ニ先ノ氣位ニテ進ミ仕太刀先々ノ先ニテ勝ツノ意ナリ。

第三本 相中段ハ互ニ先ノ氣位ニテ進ミ仕太刀先々ノ先ニテ勝ツノ意ナリ。

第四本 陰陽ノ構ニテ互ニ進ミ仕太刀後ノ先ニテ勝ツノ意ナリ。

第五本 上段晴眼互ニ先ノ氣位ニテ進ミ仕太刀先々ノ先ニテ勝ツノ意ナリ。

第六本 晴眼下段互ニ先ノ氣位ニテ進ミ仕太刀後ノ先ニテ勝ツノ意ナリ。

第七本 相晴眼ニテ互ニ先ノ氣位ニテ進ミ仕太刀後ノ先ニテ勝ツノ意ナリ。

小太刀形三本（打太刀長劍仕太刀短劍）

第一本 打太刀上段，仕太刀晴眼半身ノ構ヘ，互ニ進ミ（打太刀左足ヨリ仕太刀右足ヨリ）仕太刀入身トナルヲ打太刀ハ上段ヨリ仕太刀ノ正面ヲ打チ下ロス，仕太刀ハ体ヲ右斜ニ披クト同時ニ受ケ流シ仕太刀ノ正面ヲ打チ左足ヨリ一步引キ上段ニ取り残心ヲ示シ後相晴眼トナリ劍

尖ヲ下ゲ元ニ復ス。

第二本 打太刀下段，仕太刀晴眼半身ノ構へ，互ニ右足ヨリ進ミ仕太刀ノ入身トナラントスルヲ打太刀ハ脇構ニ披キ仕太刀ノ再ビ入身トナルヲ脇構ヨリ正面ニ打込ム，仕太刀ハ左足ヲ左ニ前進シ体ヲ左ヘ転ジ其ノ劍ヲ受ケ流シ面ヲ打チ二ノ腕ヲ押ヘ劍尖ヲ咽喉部ニ着ケ残心ヲ示シ後相晴眼トナリ劍尖ヲ下ゲ元ニ復ス。

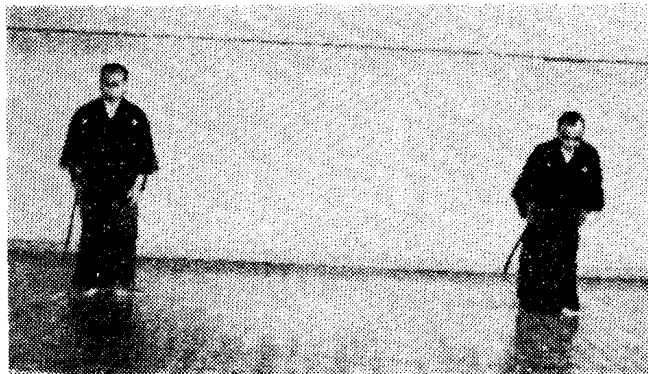
第三本 打太刀晴眼，仕太刀下段半身ノ構へ，互ニ右足ヨリ進ミ仕太刀ハ入身トナラントスルヲ打太刀ハ上段ヨリ仕太刀ノ正面ヲ打チ下ロス，仕太刀ハ其ノ劍ヲ右ヘ摺リ落スヲ打太刀ハ直ニ仕太刀ノ右脇ヲ打ツ，仕太刀ハ左足ヲ左斜ニ踏ミ込ムト同時ニ小太刀ノ鍔元ニテ打太刀ノ鍔元ヲ押ヘ入身トナリ打太刀ノ二ノ腕ヲ押ヘテ二三歩進ミ劍尖ヲ咽喉部ニ着ケ後晴眼トナリ劍尖ヲ下ゲ元ニ復ス。

Ⅲ 剣 道 形 解 説

○ 大太刀の形
立 会

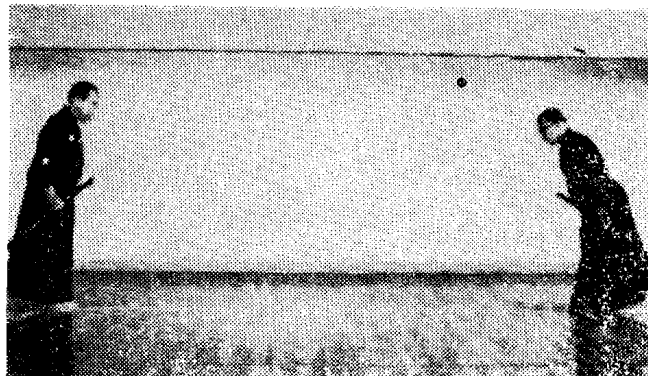
仕 太 刀 打 太 刀

右 同



正面に礼

右 同

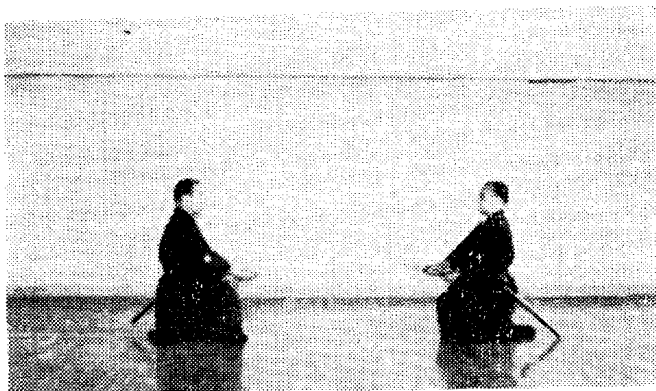


お互いに礼

仕太刀

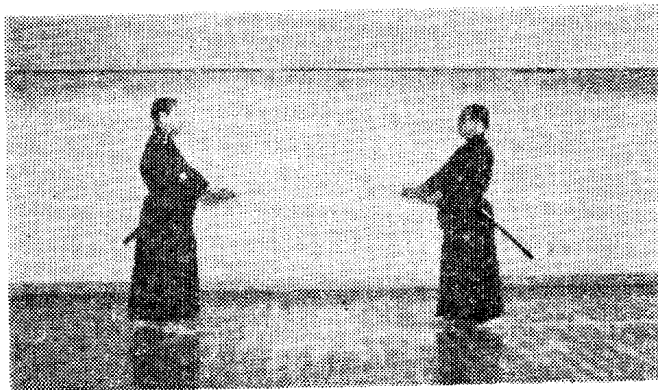
打太刀

右 同



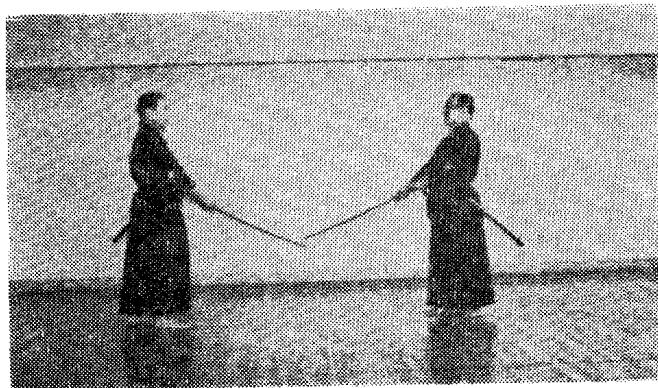
右足より三步前進し蹲踞しながら刀(木刀)を抜き合わず。

右 同



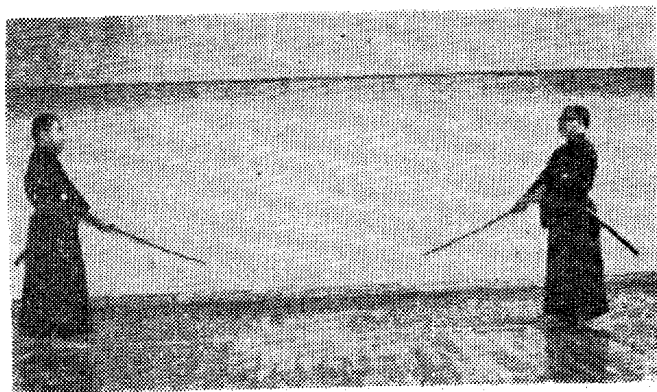
立ち上って中段となる。

右 同



構えをとく。(切先を下げ相手の左ひざより四・五センチ下, 刃は左斜下方に向ける)

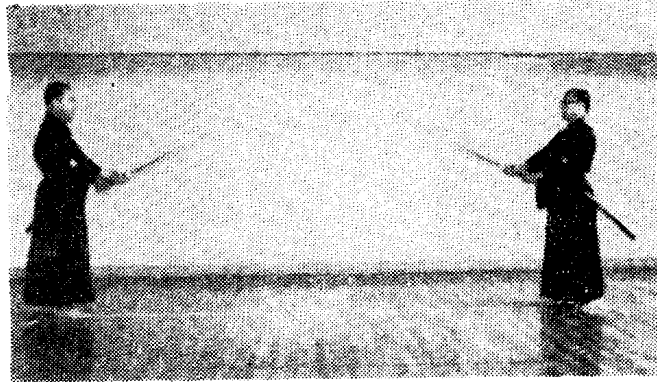
右 同



左足より小さく五歩さがる。

仕太刀 打太刀

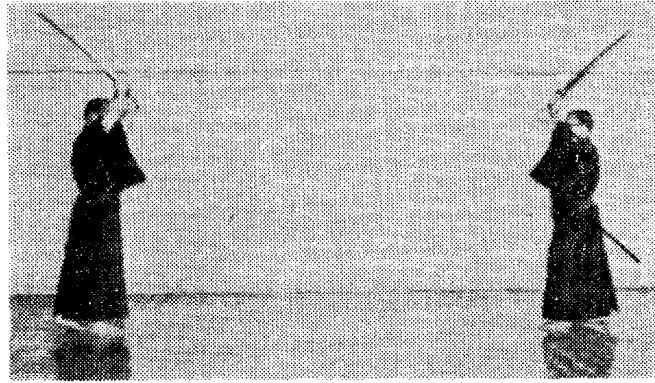
右 同



中段に構える。

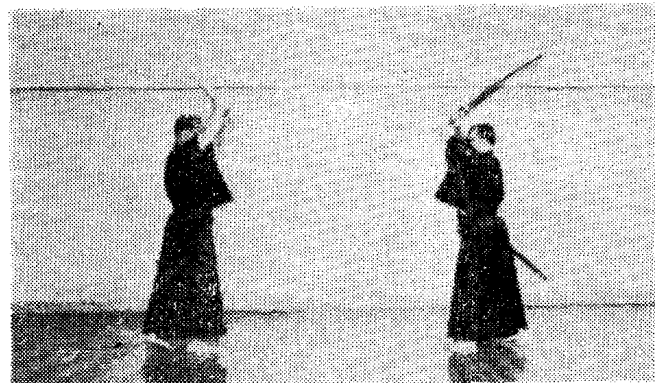
第一本

その位置で右諸
手上段に構える



左足を出しながら
左諸手上段に構える。

右足より三步前
進する。



左足より三步前
進する。

左足より送り足
にて一步後退し
て抜く。
(両手も後上方
に抜く)

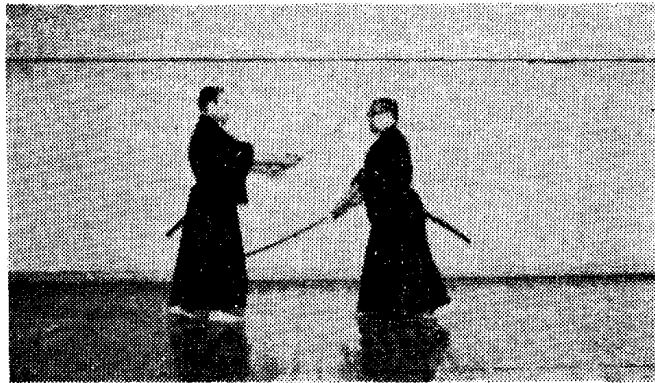


間合に接すると
同時に機をみて
右足より踏み込
んで面を打ちお
ろす。

仕太刀

打太刀

右足より一步踏み込んで面を打つ。

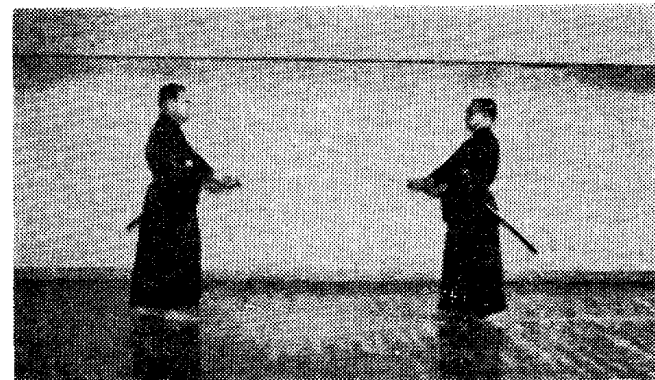


左足を前に出し左諸手上段に冠って残心を示す。



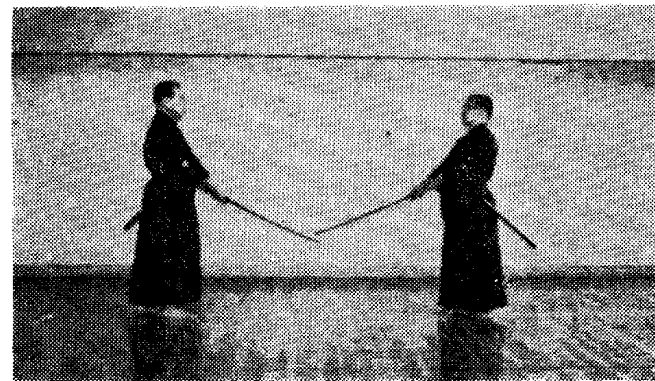
左足より送り足にて一步後退しさらに左足より送り足にて一步後退する。

上段より左足をひいて中段になる。



下段より中段になる。

右 同

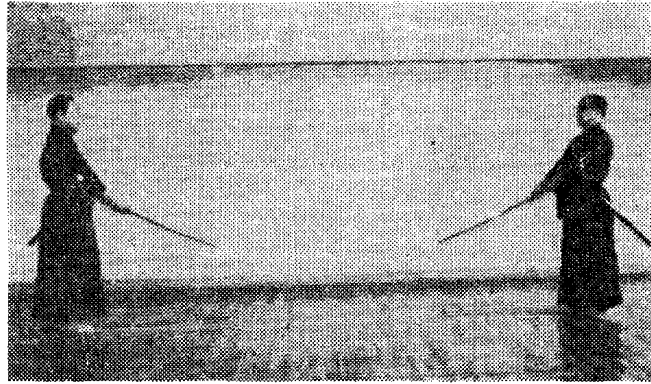


構えをとく。

仕太刀

打太刀

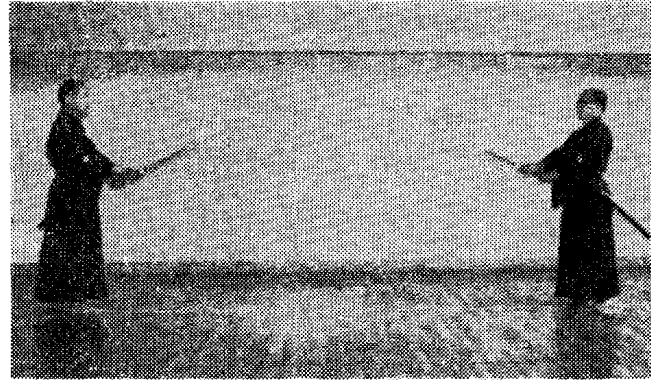
右 同



左足より小さく
五歩さがる。

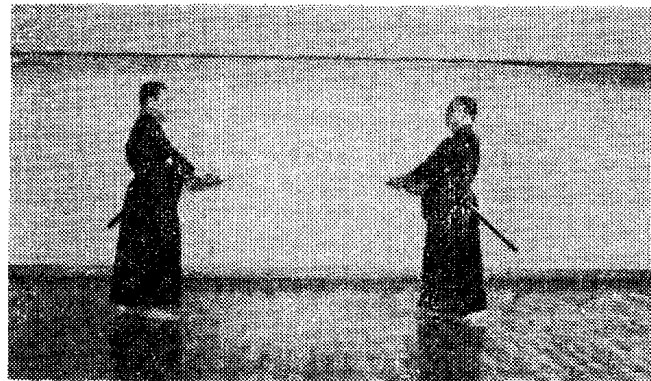
第二本

右 同



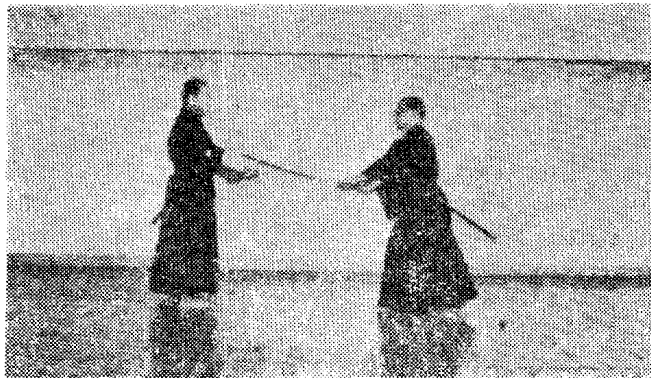
中段に構える。

右 同



右足より三步前
進する。

左足より左斜後
方に体をさばき
ながら (引きな
がら) 半円を描
く心持ちにて切
先をさげて抜
く。



間合に接するや
機をみて右足よ
り一步踏み込ん
で右小手を打
つ。

仕太刀

打太刀

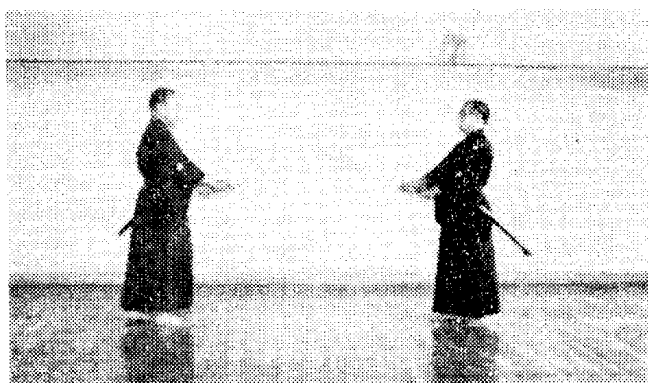
(抜いてから振り上げ)



右足より踏み込んで小手を打ち剣尖を顔面につけて残心を示す(形より気持に重点をおく)

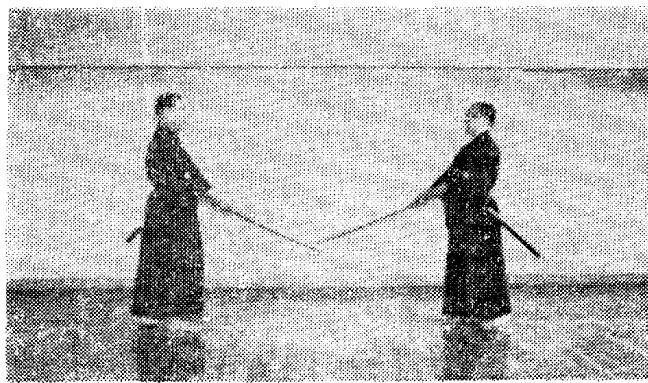


中段に構えつつ右足よりもとの位置に戻る。



中段に構えつつ左足よりもとの位置に戻る。

右 同

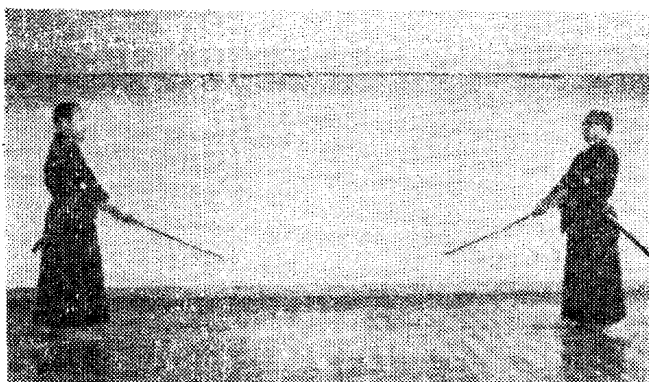


構えをとく。

仕太刀

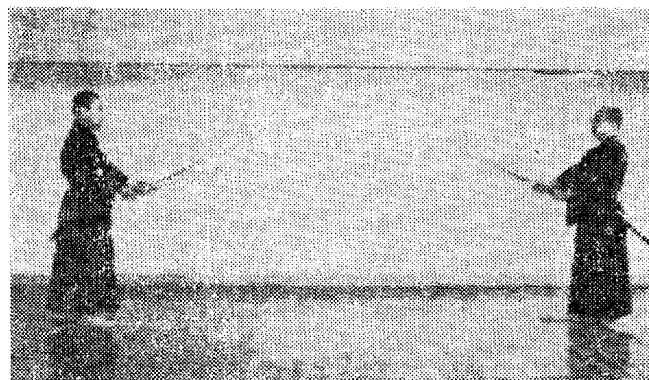
打太刀

右 同



左足より小さく
五歩さがる。

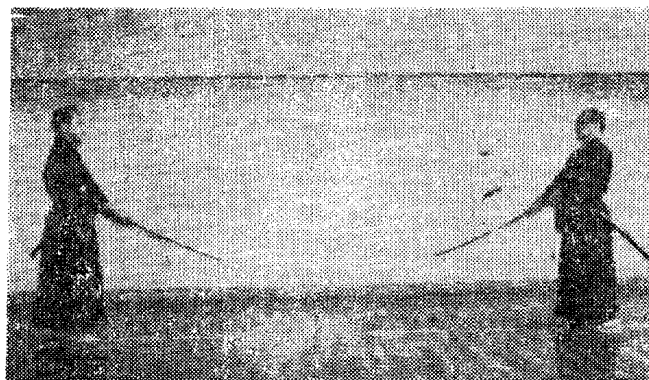
右 同



中段に構える。

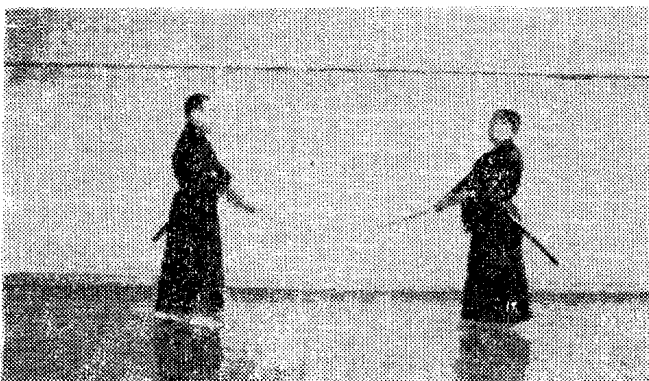
第三本

右 同



下段に構える。

右 同

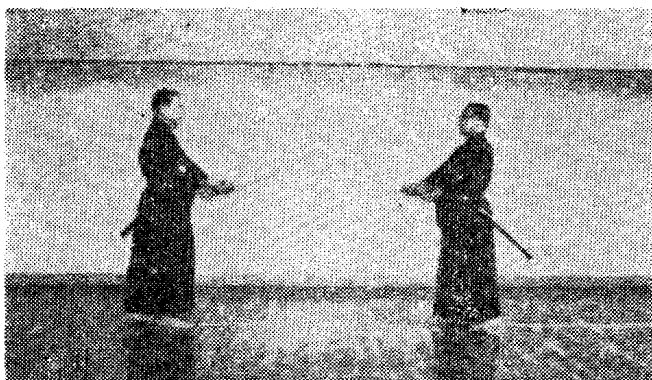


下段のまま右足
より三歩前進す
る。

仕太刀

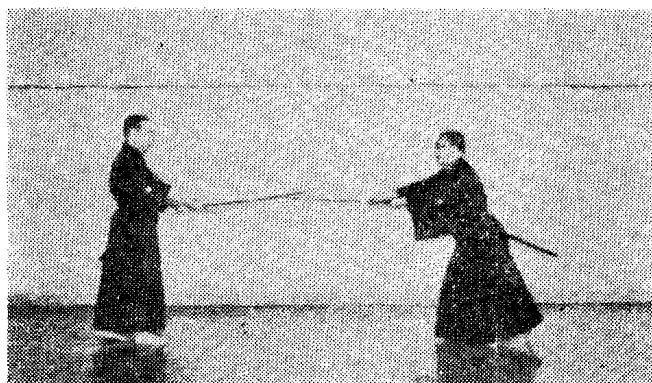
打太刀

右 同



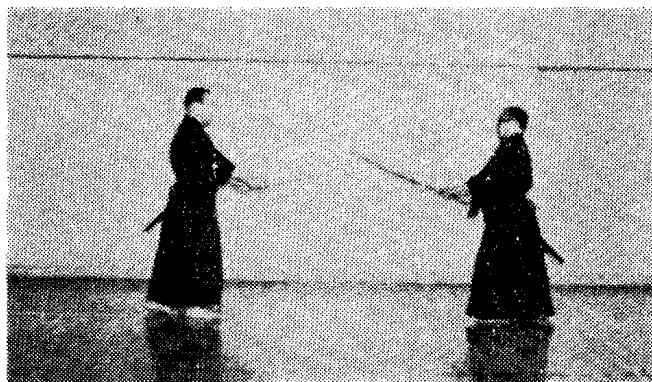
間合に接するや
中段となる。(気
争いにて)

左足より一步後
退して入れ突き
に流す。



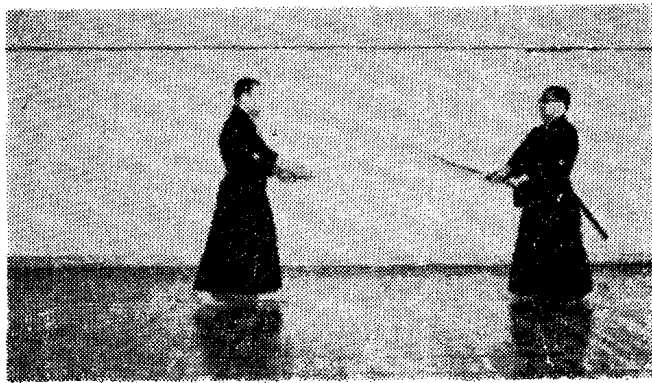
機をみて右足よ
り一步前進して
水月を突く。

強く右足より一
步前進して胸部
を突く。



右足をひきつつ
仕太刀の刀の下
より右から左へ
まわして、剣尖
を右におさえる。(左自然体と
なる)

左足を踏み込み
ながらさらに胸
部を突く。(氣勢
で位詰めにする)



左足を引き剣先
を下から返し
(しのぎで) 左
に押える。

仕太刀

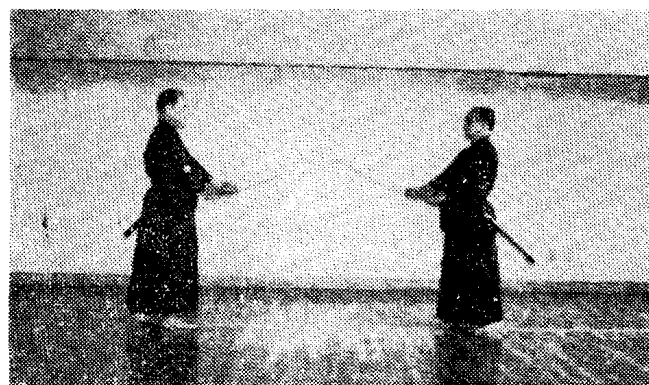
打太刀

剣先を相手の寸田につけながら右, 左, 右足と位詰めで前に出る。



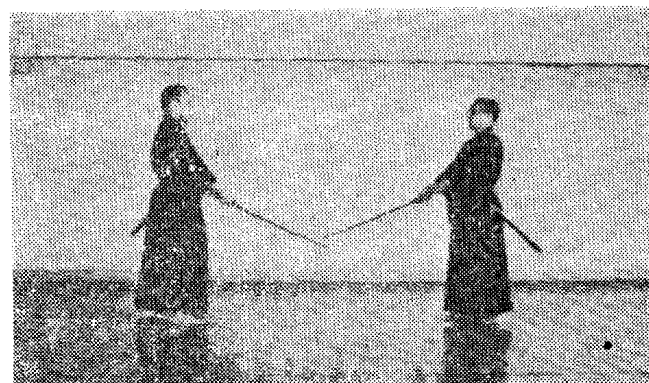
構えをときながら左, 右, 左足と歩み足で後退する。

大きく左, 右, 左, 右, 左足と歩み足でもとの位置にかえる。



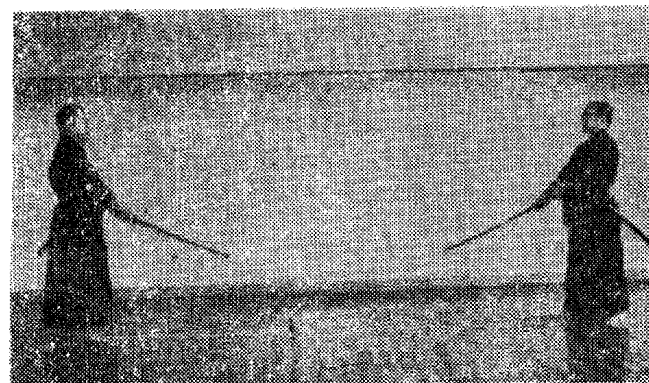
仕太刀の三步目より中段にかえり, 右, 左, 右足と前進してもとの位置にかえる。

右 同



構えをとく。

右 同

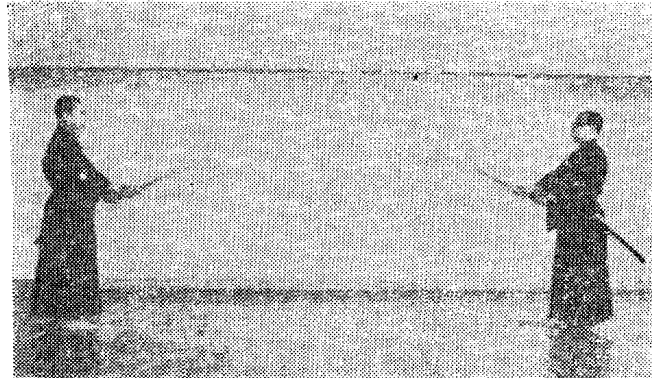


左足より小さく五歩さがる。

仕太刀

打太刀

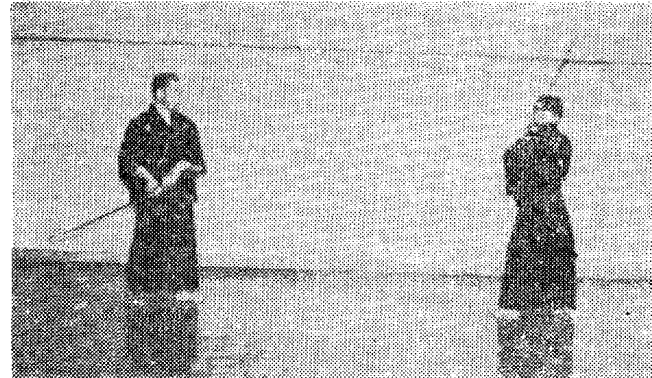
右 同



中段に構える。

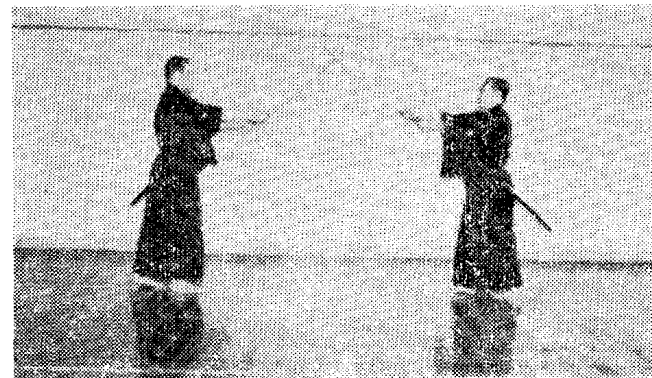
第四本

脇構=右足を一步後に左半身となり, 刀を右脇に構える。(刀は右斜下に, 剣先は下段より少し下 (刀身が相手より見えないように))



八相=左上段の構えからそのまま右拳を右肩の辺まで下ろした形に構える。(つばを口の 高さにして十センチ位はなす)

左足より三步進み, 右足を一步踏み出して正面を打ち相打ちとなる。



左足より三步進み, 機をみて上段に冠り右足を一步踏み出して正面を打ち, 切り結ぶ。

左足を左斜面上出す (転ずる) と同時に巻きかえす。(合気はずす気で行なう)

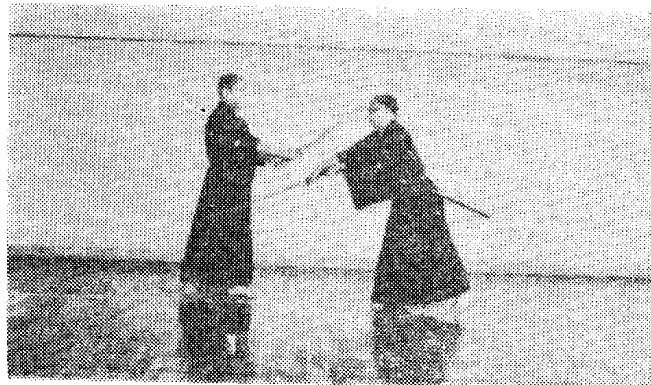


相互の刀身, 鎧をけずるようにして自然に中段となり, 機をみて, 右足を踏み出して右肺を突く。

仕太刀

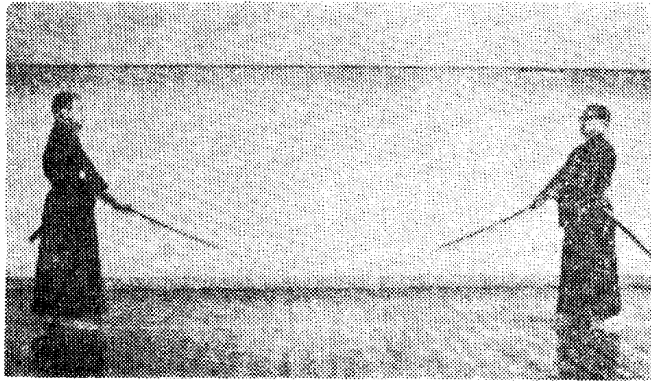
打太刀

打太刀の面を打ち、後剣先を面の中心につけつ。



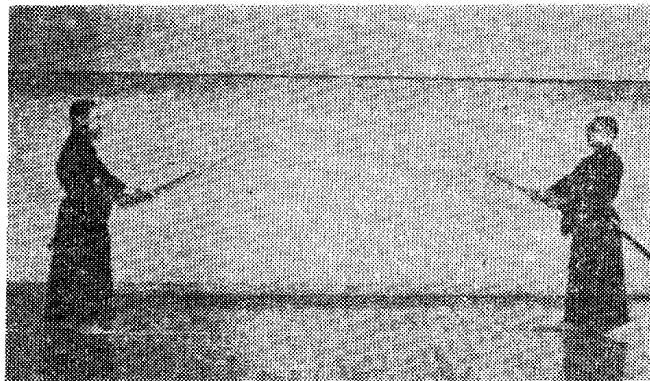
体はやや前にかかる。

右 同



中段となり構えをといて元の位置に帰る。

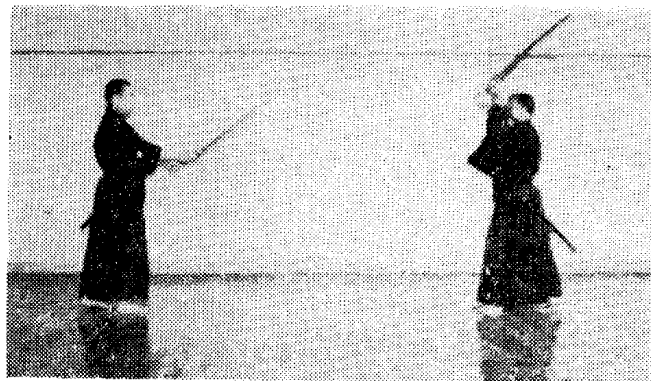
右 同



中段に構える。

第五本

中段に構える。
(剣先を少し高くして刃を少し左下に向ける)



左足を一步出しながら左諸手上段に構える。

仕太刀

打太刀

右足より三步進み、左足より一步引きつつ、その刀を左鑓ですり上げる。



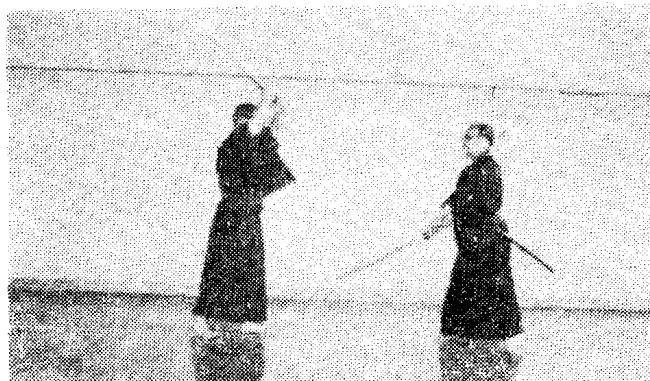
左足より三步進み、機をみて右足を踏み出し正面を打つ。

右足より一步踏み出して正面を打ち、剣先を面の中心につける。



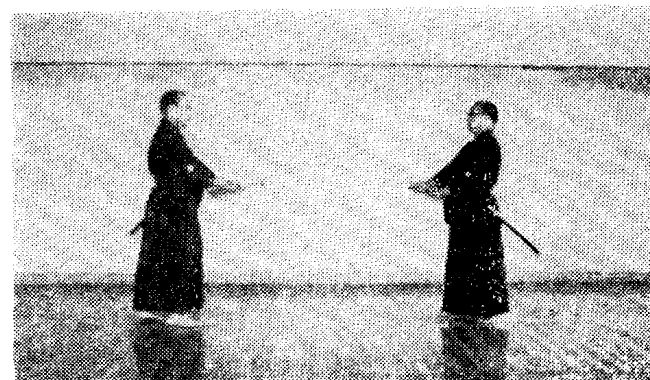
すり上げられた刀は右下におちる。(刀は右下を向く)

右足を一步引き左諸手上段となり残心を示す。



死太刀となる。

左足を引きつつ剣先をさげ中段となり、右足より三步すすむ。

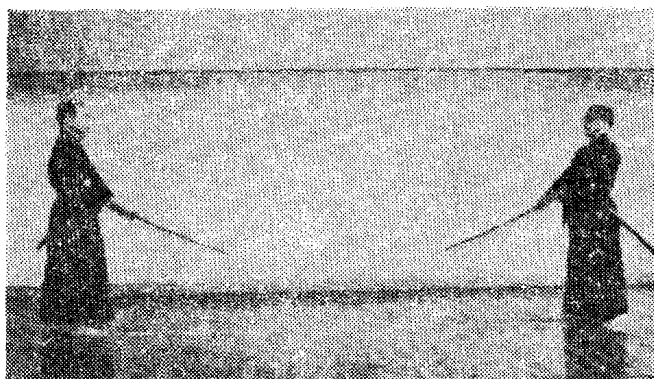


中段に構えて左足より三步さがる。

仕太刀

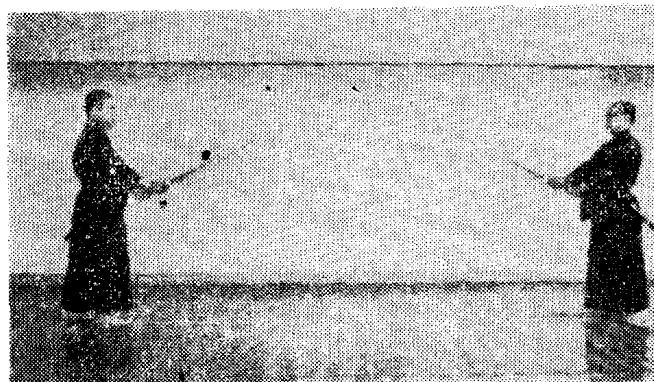
打太刀

右 同



構えをといて元の位置に戻る。

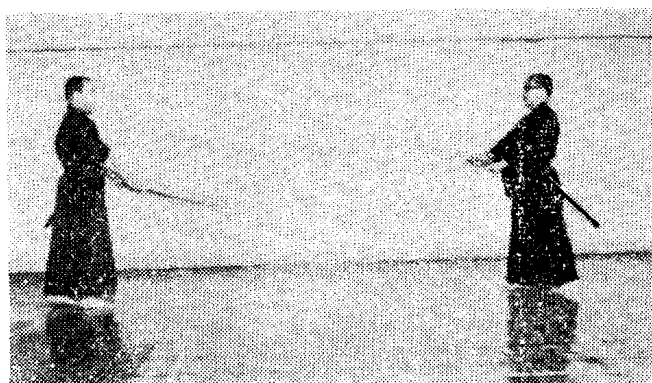
右 同



中段に構える。

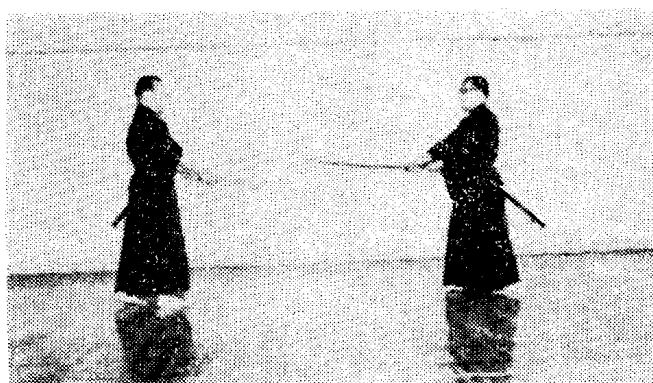
第六本

下段に構え、
右足より三步
進む。



中段にて右足よ
り三步進む。

間合に接するや
機をみて下段よ
り両拳を攻めつ
つ中段になる。



応ずる心持ちに
て剣先を少し下
げる。(刀は右
斜下にむける)

仕 太 刀

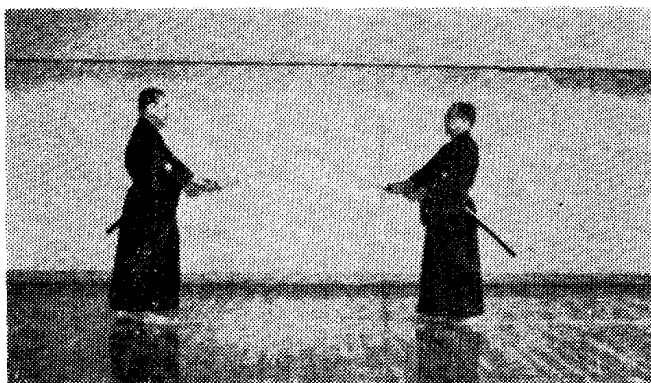
打 太 刀

すかさず剣先を
左拳につけ、右
足より一歩進
む。



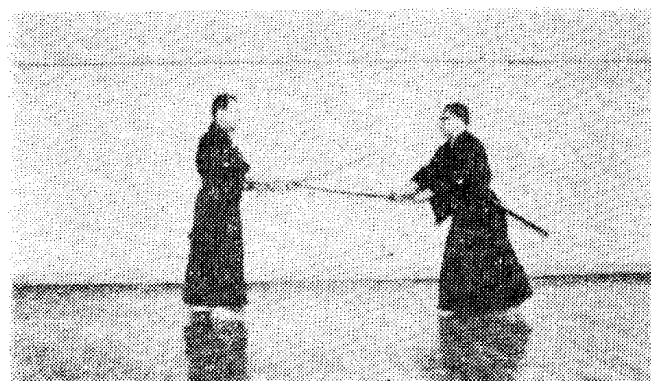
右足を一歩引き
左諸手上段とな
る。

剣先を少し下し
中段となる。



左足を一歩引き
中段となる。

左足を左にさば
きながら左より
すり上げる。(物
打その右鐙で)



機をみて右足よ
りふみこみ右小
手を打つ。

右足を踏み出し
て右小手を打
つ。



仕太刀

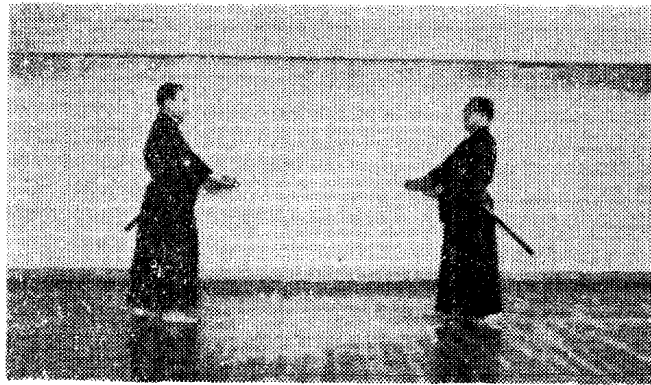
打太刀

剣先を面の中心につけ、左足を踏み出し、左諸手上段に構え残心を示す。



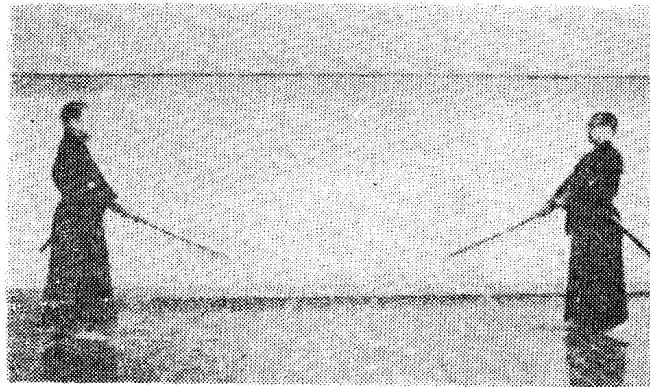
剣先を下げ左斜に大きく一步さがる。

左上段より下ろしつつ中段となり、抜き合わせた位置に戻る。



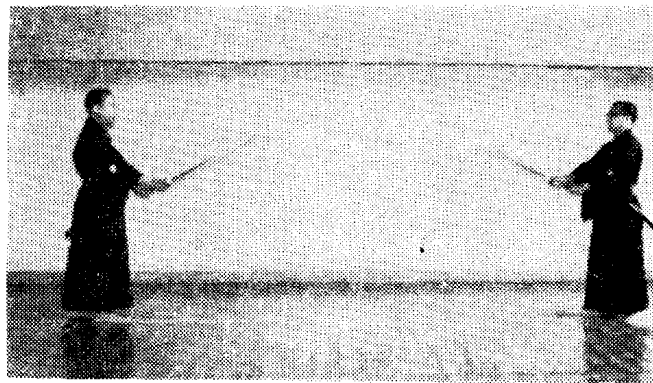
右足より剣先を中段にしつつ抜き合わせた位置に戻る。

右 同



構えをといて元の位置に戻る。

右 同



中段に構える。

仕太刀

打太刀

第七本

右同



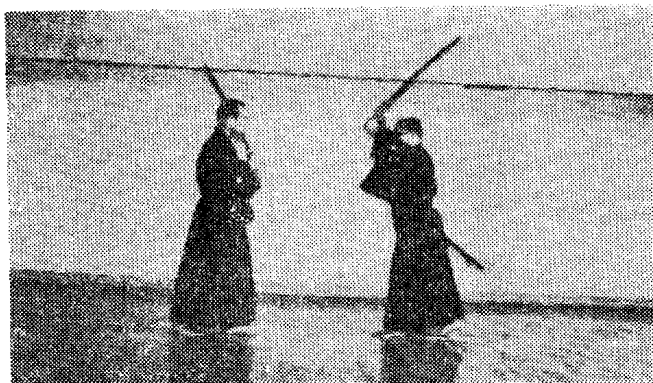
右足より三步進む。
む。

左足より体を引
きつつ諸手を伸
して打太刀の刀
を物打の左鐙で
支える。



機をみて右足よ
り一步踏み出し
胸部を突く。
(刃は仕太刀の
左に向く)

中段となり、右
足を少し出し、
左足を踏み出し
て体をすり違い
ながら右胴を打
つ。



左足より半歩さ
がりながら中段
となり、左足を
踏み出しふりか
ぶる。

右足を踏み出し
て抜ける。(こ
の時、相手を注
視する)



右足を踏み出し
て正面を打つ。

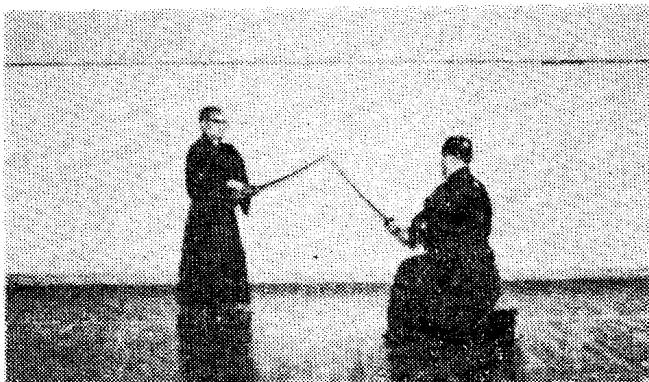
仕太刀

打太刀

右ひざをつき、
右つま先をたて
脇構えをなし残
心を示す。



その体勢から刀
を大きくかぶり
つつ右ひざを軸
に転じて、打太
刀に面し、中段
となる。



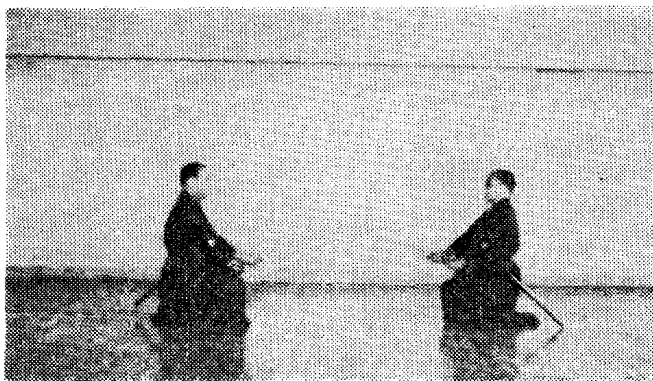
体を転じて、仕
太刀に面し中段
になる。

十分なる氣勢で
右足より一步踏
み出しつつ立ち
上がり、左に回
りながら抜き合
わせた位置に帰
る。



左足より一步ひ
き、左に回りな
がら抜き合わせ
た位置に帰る。

右 同

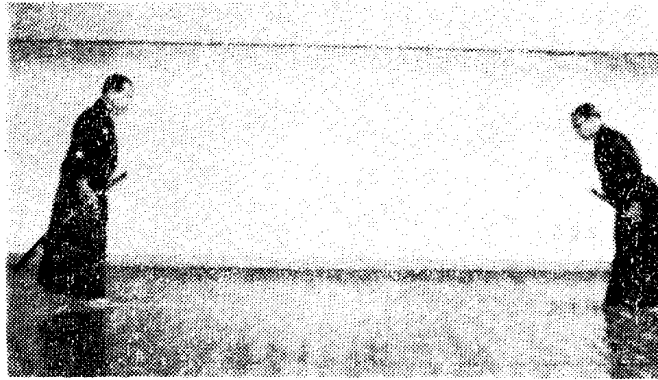


蹲踞し、刀をお
さめ左足より五
歩さがる。

仕太刀

打太刀

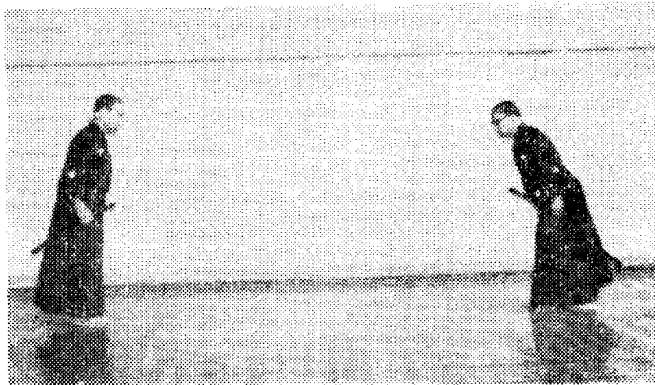
右 同



お互いに礼をする。

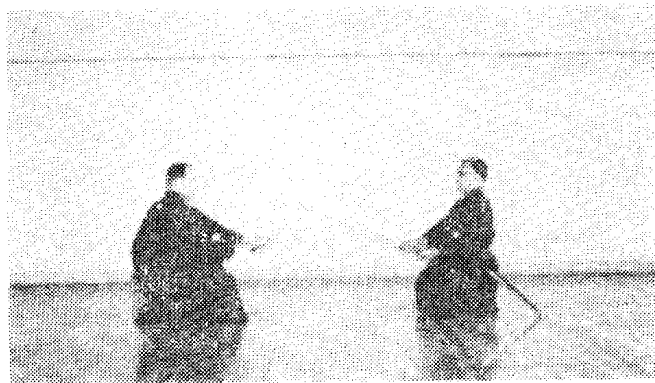
○ 小太刀の形
立 合

右 同



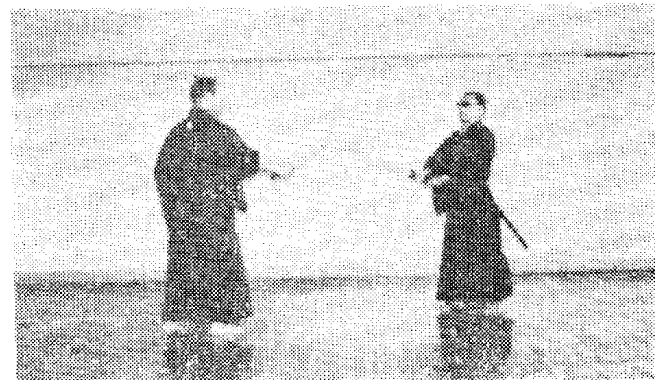
お互いに礼をする。

右 同



そんきょしながら
刀を抜き合わせる。

右 同

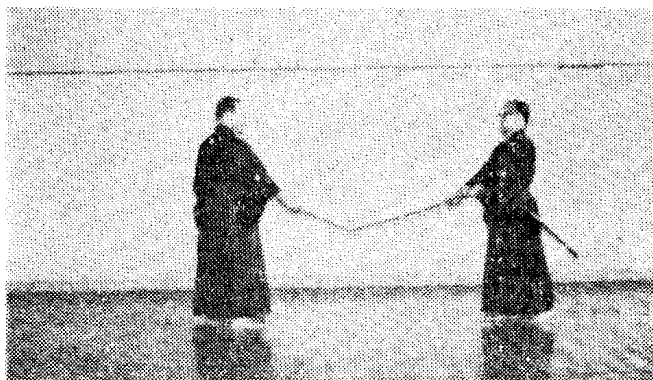


立ち上がる。

仕太刀

打太刀

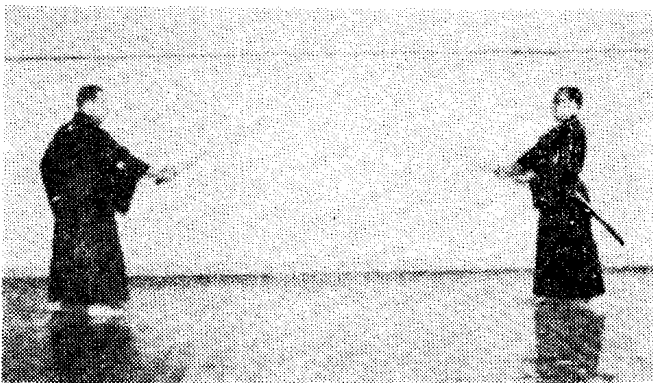
右 同



構えをといて左足より小さく五歩さがる。

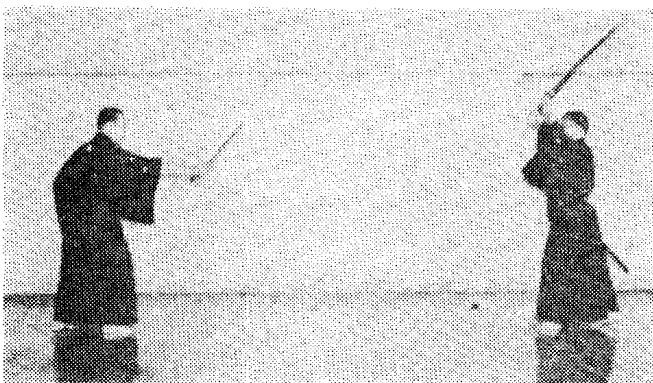
第一本

右 同



中段に構える。

中段 (晴眼半身の構え) に構え右足より三歩前進する。(剣先を少し高くして上段にそなえる)



左諸手上段に構え、左足より三歩前進する。

体を右斜にさばきながら同時に右手を頭上にあげ刃を後にして鎧で受け流す。

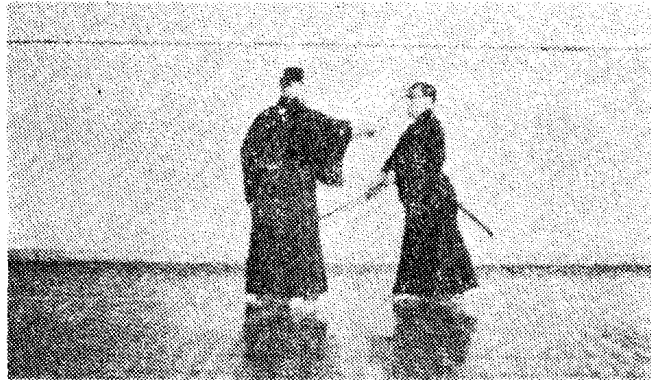


間合にはいると同時に右足を踏み出し、正面に打ち下ろす。

仕太刀

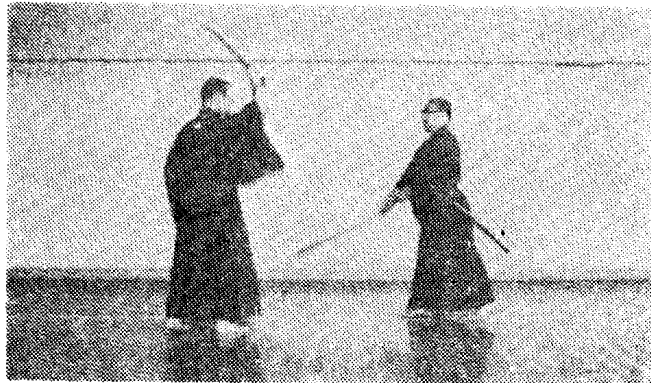
打太刀

右足を踏み出し
正面を打つ。

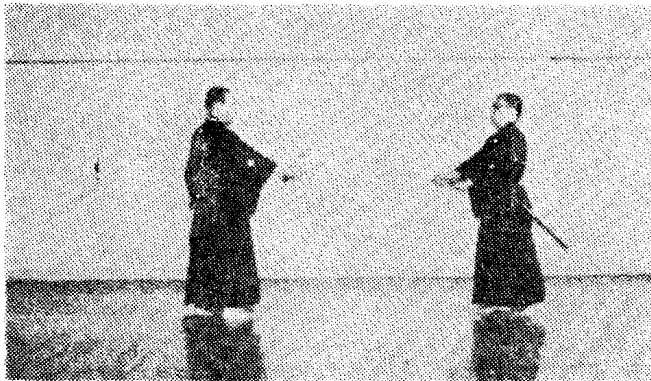


仕太刀に面を向
けて注視する。

左足より一步引
き, 上段となり
残心を示す。

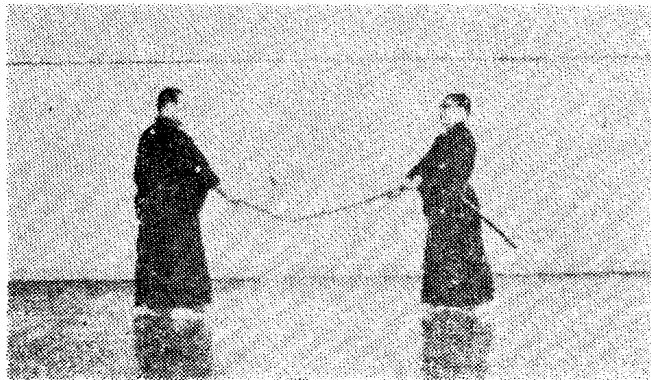


その位置で剣先
を下ろし, 刀を
合わせる。



仕太刀に向き中
段となり刀を合
わせる。

右 同

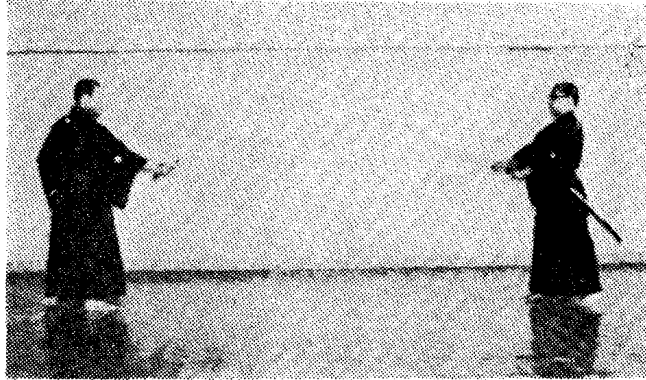


左足より抜き合
わせた位置にも
どり, 構えをと
いて元の位置に
帰る。

仕太刀

打太刀

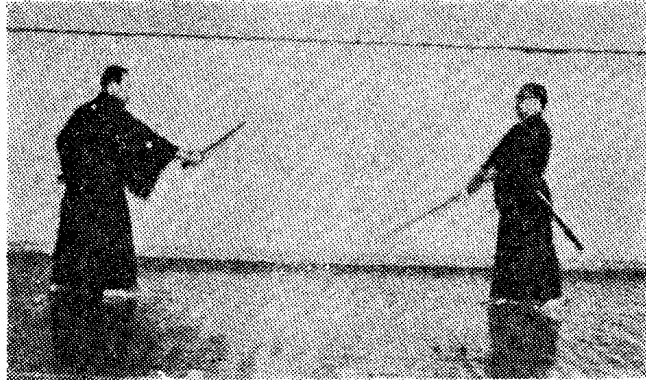
右 同



中段に構える。

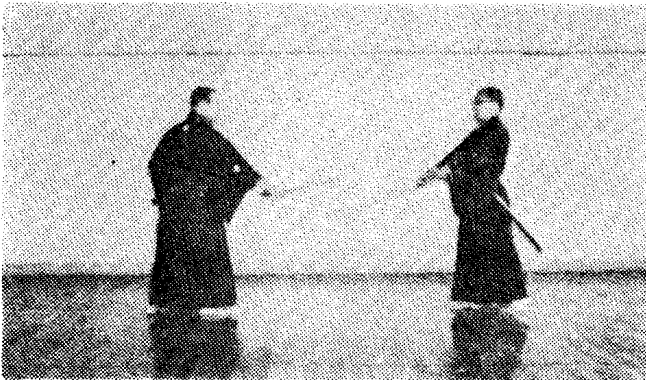
第二本

晴眼半身の構え
で右足より三歩
進む。



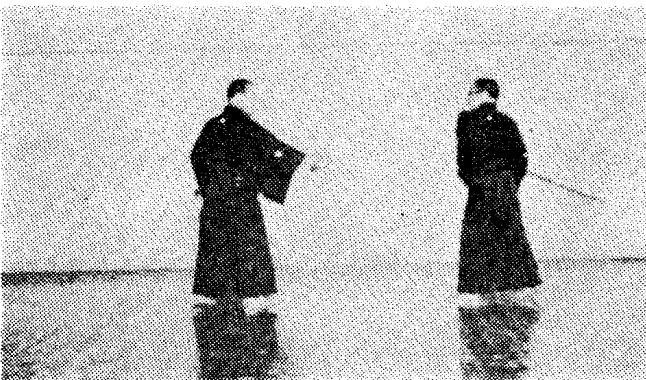
下段に構え右足
より三歩進む。

打太刀の刀を制
し入身になろう
とする。



下段より中段に
なろうとする。

入身となり，剣
先を咽喉につけ
右足から一步攻
める。

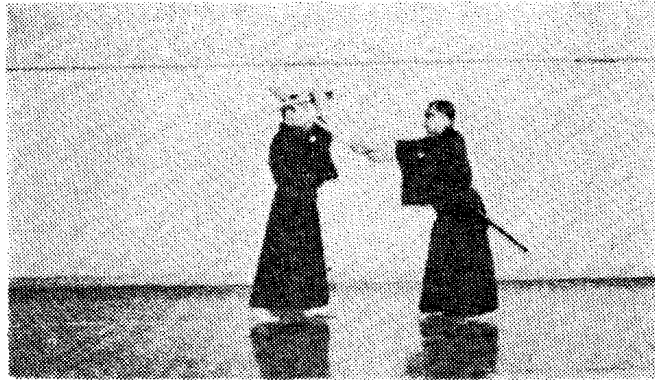


右足を後にひき
脇構えになる。

仕太刀

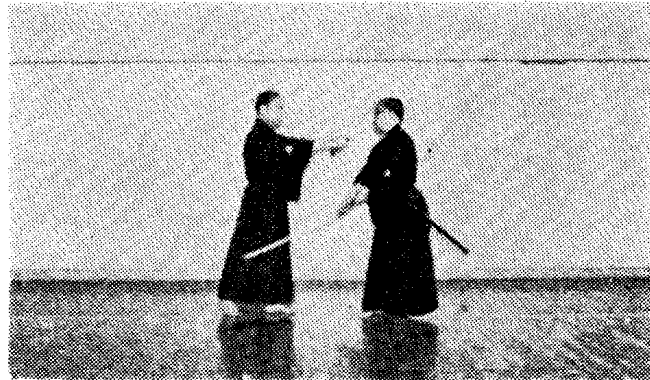
打太刀

左足を左斜前に
進め体を左にさ
ばきながら右手
を頭上にあげ、
剣先は右後下
に向け、刃を後
にして右鎧で受け
流す。



上段に変じて、
右足より踏み出
し正面を打つ。

正面を打つ。



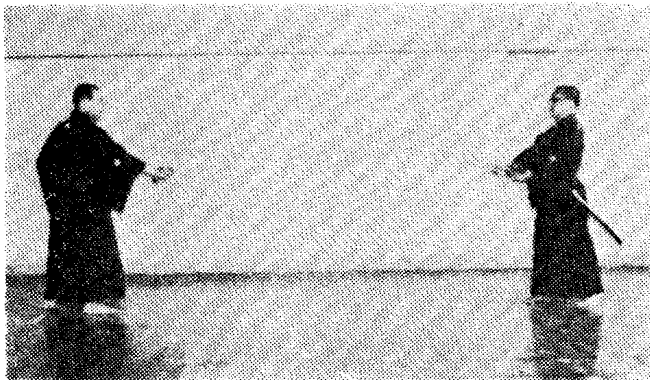
剣先を下げる。

打太刀の二の腕
をとり、右手首
を腰にして剣先
を咽喉部につけ
残心を示す。剣
を押えながら右
足から抜合わせた
位置にもどり構
えをといて元の
位置に戻る。



仕太刀を注視す
る。左足より抜
き合わせた位置
に帰り、構えを
といて元の位置
に戻る。

右一同



中段に構える。

仕太刀

打太刀

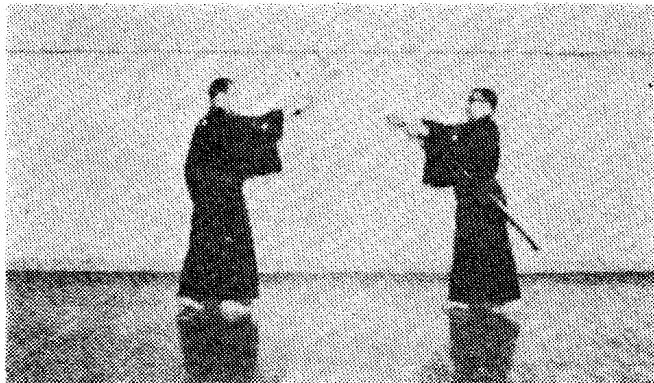
第三本

下段に構え右，
左と進む。



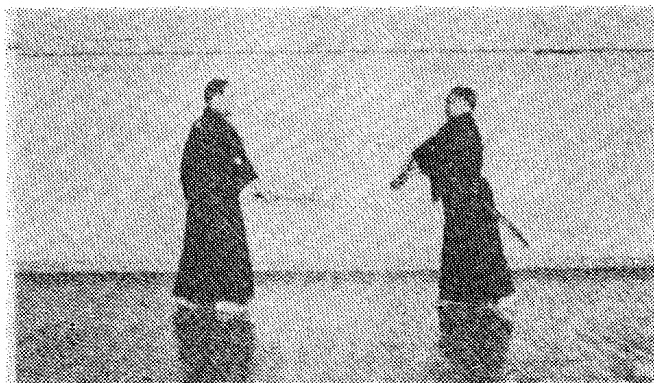
中段にて右，左
と進む。

右足をふみ出す
と同時にその刀
をすり上げる。



右足を踏み出す
と同時に上段よ
り正面を打つ。

打太刀の右斜下
にすり落とす。



左足を左斜前に
ふみ出し，体を
左斜にさばきな
がら打太刀の刀
を左鍋ですり流
す。



左足を踏み出し
ながら右胴を打
つ。

仕太刀

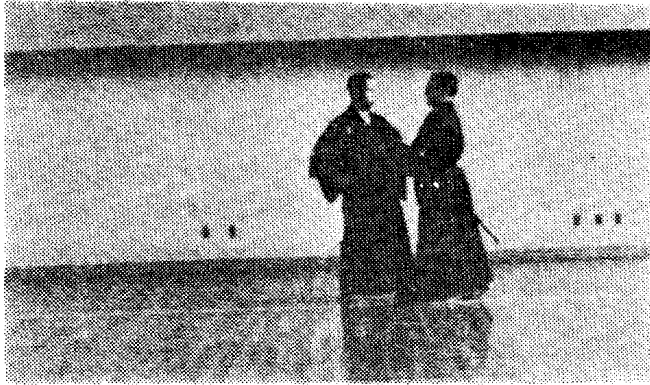
打太刀

左足を左斜にふみこむと同時に小太刀のつば元にて、打太刀のつば元を押える。二の腕を押えて左、右左足と進む。



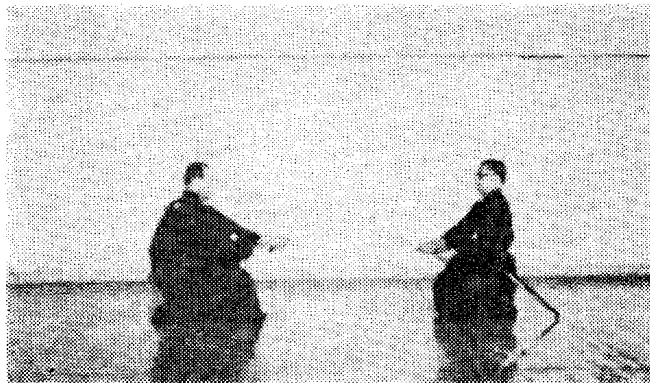
右、左、右足と後方に下る。

右手首を腰にあて剣先を咽喉部につけて残心を示す。剣先を合わせながら抜き合わせた位置に帰る。



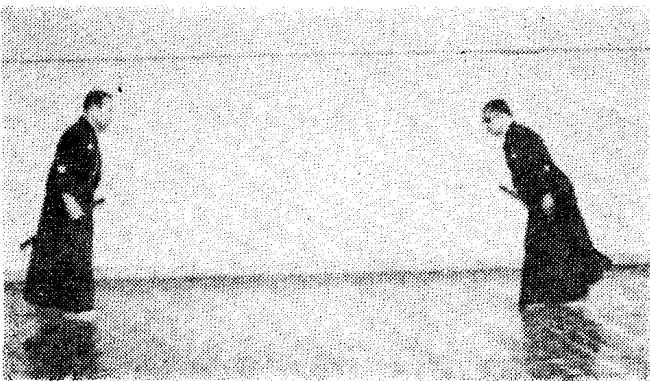
右足より剣先を合わせながら抜き合わせた位置に帰る。

右 同



互いにそんきよして、刀をおさめ、立ち上って元の位置に戻る。

右 同

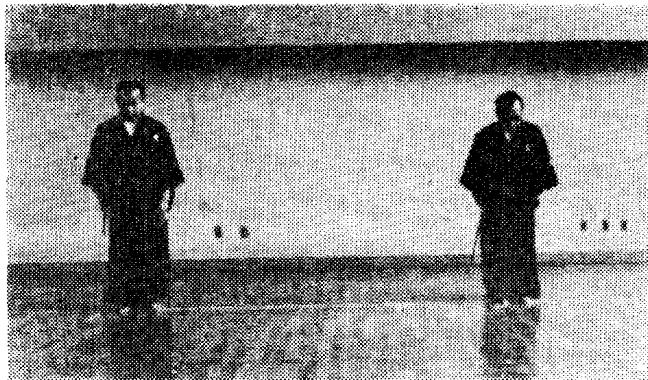


互いに礼をする。

仕 太 刀

打 太 刀

右 同



上座に礼をする。

Ⅳ 結 び

1. 理合にかなった動作で行なうこと。

形は基礎的な理合を知ることがねらいであるから、打突の間とタイミング、残心のとり方等に特に注意すること。

2. 先の気で行なうこと。

剣道は先の気で行なうことが最も大切であるが、形は形式に流れ、先の気を失いやすいから充実した気力で行なうよう心掛けなければならない。

3. 正しい心身で行なうこと。

剣道は正しい姿勢と無念無想の精神で行なうことが目標であるが、形は、それを習得するのに好都合であるから、正しい姿勢と精神で行なうように心掛ける。

4. 合理的な動作で行なうこと。

形は、打突される心配が無いから、正しいフォームで行ないやすい。従って、体捌き、及び、打突動作等、正しい要領で行なうように心掛けなければならない。

以上述べたように剣道の内容には「しない」打の剣道と形剣道とに大別することが出来る。「しない」打の剣道は徳川中期以後のことであるが、それ迄の剣道は専ら形剣道であったのである。剣道が深遠なるものとして尊ばれる一つの理由は精神面を重視した理合を基盤にして永年にわたっての

研究と修練によるものである。従って現代の剣道においても形剣道をも修得することが肝要である。

参 考 文 献

- 1) 笹森順造著 剣道 旺文社 p. 13. 昭和43年2月20発行。
- 2) 笹森順造著 剣道 旺文社 p. 8. 昭和43年2月20発行。
- 3) 重岡 昇著 日本剣道形解説 トーキ印刷 p. 3. 昭和43年5月発行。
- 4) 重岡 昇著 日本剣道形解説 トーキ印刷 p. 5. 昭和43年5月発行。
- 5) 高野弘正著 剣道及び剣道史 平凡社 p. 151-162. 昭和9年12月発行。